

教職大学院における「特別支援教育力開発実習」実施方法の開発 ー特別支援教育の授業力開発に焦点化した模擬実習を通じてー

佐々木 全*, 杉本まゆき・熊谷佳展・立花文子・福田博美・田村典子・遠藤寿明**,
名古屋恒彦***, 高橋和夫*

*岩手大学教職大学院設置準備室, **岩手大学教育学部附属特別支援学校, ***岩手大学教育学部
(平成28年3月2日受理)

1. はじめに

教職大学院は、複雑化・多様化する学校教育の諸課題に対応しうる、高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員の養成を使命とするものである。本学でも平成28年度の開設に向けて鋭意準備中である。

本学教職大学院は、現職院生（教職に就きながら教職大学院に研修派遣された者）と学卒院生（教育学部を卒業し教職大学院に進学した者）各8名、計16名を定員とする。修了後、現職院生はミドルリーダーとして、学卒院生はスーパールーキーとして学校現場で活躍することが期待されている。

さて、そのための重要なカリキュラムの一つに教育実習があるが、この目標や内容、方法を明らかにすることは喫緊の課題である（清水、清水、菅原、根木地他 2015）。本学教職大学院での具体的な実習内容には「学校マネジメント力開発実習」、「授業力開発実習」、「子ども支援力開発実習」、「特別支援教育力開発実習」がある。これらのうち、「特別支援教育力開発実習」は内容として「学校マネジメント力開発実習」、「授業力開発実習」、「子ども支援力開発実習」を含む。すなわち、附属特別支援学校をフィールドとしての三種の実習内容に取組むものである。ただし、「学校マネジメント力開発実習」の内容については学卒院生がこれに取組み、現職院生は、別途、教育委員会等での実習に取組む。

また、「特別支援教育力開発実習」は、対象によって「特別支援教育力開発実習Ⅰ」と「特別支援教育力開発実習Ⅱ」に分類される。前者は、学卒院生を対象とし、1年次の11月から4週間を学校

マネジメント力開発と、授業力開発に重点を置く。さらに2年次の11月前後から6週間を子ども支援力開発に重点を置いたセンター的機能実習とする。

一方「特別支援教育力開発実習Ⅱ」は、現職院生を対象とし、1年次の11月から2週間を授業力開発に重点を置く。2年次の11月前後から5週間を子ども支援力開発に重点を置く。

これらの実施に際しては、実習者である院生、実習校で対応する実習指導教員、実習を企画し総合的な指導を担う大学教員の三者が取組内容の実施イメージを具体的に共有する必要がある。特に、授業力開発に関する内容は、教員免許取得の必要要件である学部段階での「教育実習」のイメージを重ねがちであるだけに両者の差別化が必要である。さらに、現職院生が実習を行うという新たな条件についても、実施イメージの構築と共有が欠かせない。

そこで、本稿では「特別支援教育力開発実習Ⅱ」の実施イメージを、実施方法という具体的な内容として開発し、提起することを目的とする。

2. 方法

「特別支援教育力開発実習Ⅱ」の実施方法を開発するために、模擬実習を行い、そのプロセスにおいて必要な方法を実践的に開発する。また、実施上の必要事項を検討し、考察する。

具体的には、現職教員を対象とした「特別支援教育力開発実習Ⅱ」の実施イメージの構築を目指す。そもそもシラバスによれば、この実施方法として次の3つを挙げている。すなわち、①学部・

学級配属による学習支援及び学級経営について補助業務を通して高度な実践的理解に至る、②学習支援における子ども理解の内容と方法について、補助業務を通して実践的に学習し、指導的な立場から助言できる機会を設定する、③特別支援学校における児童生徒への支援及び学級経営のあり方と課題について管理職としての立場からレポートを作成し、意見交換の機会を通してお互いの意識啓発を図る、である。

本稿ではこれらのうち、学部段階での「教育実習」との差別化を図るべき①②について取り上げる。ただし、模擬実習実施時期が本校の繁忙期でもあったことを鑑み、実習内容の主は授業における「補助業務」とした。

模擬実習は、平成27年9月現在での教職員設置準備室による実施構想に基づき、次のように実施した。すなわち、①実習生自身による「個別の実

習計画」の作成、②実習生と実習校との打ち合わせ、③実習、④「実習日誌」の作成、⑤まとめとしてのレポート「実習報告書」の作成、⑥リフレクション（省察）指導、⑦事後協議である。

実習生は、ミドルリーダー候補としての現職院生を想定し、奇しくも適齢でもあった第一筆者がその役を担った。実習生の研究テーマとして「重複障害者のための領域・教科を合わせた指導プランの検証」を設定し、実習を通じて、このテーマの一端である個別の指導計画の運用と活用実態を調査することとした。

実習期間として、平成27年9月14日～18日（1週間、ただし、諸事情から午前中のみの実施）を設定した。事前の取組として、平成27年9月2日に副校長と小学部主事である第五～六筆者との打ち合わせ、9月8日に配属学級にて「プレ実習」（事前体験）を行った。配属は附属特別支援学校

小学部某組とし、担任団である第二～四筆者が実習指導教員の役を担った。リフレクション指導は、9月29日に実施し、第七～八筆者が指導者役を担った。そして、事後協議は、第一筆者と第二、五～七筆者が会し12月8日に実施した。

3. 結果

模擬実習は、次のような手順をもって実施した。

- (1) 「個別の実習計画」の作成
「個別の実習計画」とは、実習生が自身を対象として作成するものである。この様式を作成した上で所定の内容を記入した。このプロセスでは、大学教員による指導を受けた。これを図1に示した。なお、ここでは院生の研究テーマを記し実習との関連を示した。
- (2) 事前打ち合わせの実施

■ 個別の実習計画		実習 種別	特別支援教育力 開発実習（授業）	実習 期間	平成27年9月14日（月） ～9月18日（金）
I 概要	事前 打合	9月2日（水） 15時00分～16時30分	指導 教官	杉本まゆき 先生 熊谷佳展先生 立花文子先生	
	事後 打合	9月 日（ ） 15時00分～16時30分	担当 教員	名古屋恒彦（研究者教員） 高橋和夫（実務家教員）	
	研究 主題	重複障害者のための領域・教科を合わせた指導プランの検証 （名古屋、2014）			
	自己 キャリア の理解	・ 中核的中堅教員（スクールリーダー） ・ 教職員との連携（同僚性） ・ 授業実践力			
II 目標		同僚性あるリーダーシップを発揮できるよう、その素地となる授業実践力を高める。下位目標として次の4点を挙げる。 (1) 適切かつ妥当な個別の指導計画の作成を学ぶ。 (2) 個別の指導計画の授業場面での実施について学ぶ。 (3) 授業実践とその評価について学ぶ。 (4) 一連のプロセスにおける教師間連携を学ぶ。			
III 内容		・ 配 属：小学部すみれ組 ・ 担当授業：日常生活の指導、生活単元学習、体育、チャレンジ。 ・ 実習内容 ① 授業では、STとして、展開の補佐、授業の準備をする。 ② 授業では、Dさんを個別に担当する。 ③ Dさんの個別の指導計画について、授業における実施に携わる。 ④ 授業及び実習評価会議を行う。ここでは、重複障害者のための領域・教科を合わせた指導プランを対照し、両者を検討する。			
IV 評価 ※目標に対応	自己 評価	(1) 日々の授業において反映可能な内容を取り扱う必要性を確認した。 (2) 教師チームでの共有や他の児童との並行実施など多重条件にあって教師の適宜の判断が求められることを確認した。 (3) 授業目標と個別の指導計画における目標の階層性によって指導及びその成果の一貫性が担保されることを確認した。 (4) 日常的なチームワークを基礎とし、適宜の判断と情報共有が必要であることを確認した。			
	総括	本実習において、授業力、子ども支援力が刺激され、スピノフ授業案の作成に至った。また、教師としての自己のキャリアを振り返り、ミドルリーダーとしての自覚や振舞いのモデルが明確になりはじめた。			

図1 個別の実習計画（様式と記入例）

「個別の実習計画」をもって、実習担当教員との打ち合わせを行った。実習内容や日課を確定した。また、配属学級の児童の様子や実習期間中の授業計画などの情報を得た。このとき、実習生の研究テーマと学級経営上の対応の必要性から、一人の児童への対応に重点を置く体制とすることが決定された。なお、実習生は、配属学級における状況を直に知りたいと考え、実習期間と同様の動きを事前体験する機会として「プレ実習」を得た。

(3) 実習

実習生の日課は、出勤、授業準備、職員朝会と学部学級の打ち合わせ、それ以後1～4校時の授業に参加した。この中で、配属学級の生活日課に即して、対象とする児童を中心に、授業場面における個別の指導計画の活用の実態を観察しつつ、担任団の随時の指示に従い授業の補助に努めた。なお、授業内容は、日常生活の指導、生活単元学習、体育等であった。

(4) 「実習日誌」の作成

実習記録として「実習日誌」の様式を作成した上で内容を記入した。この一部を図2に示した。これは、文書作成ソフトで入力した。記述内容は、研究に関する記録メモを兼ねることを想定した。分量はA4で5～6ページに及んだが、電子データなので分量を問う必要がないと考えた。

(5) 「実習報告書」の作成

「実習報告書」の様式を作成したうえで内容を記入した。このプロセスでは、大学教員による指導を受けた。これを図3に示した。この内容は、実習日誌をもとにした省察であり、かつ、現職教員は自らの教職経験をも含んだ省察をすすめられるように項目立てを行った。その内容は、①調査結果（研究テーマ、実習目標に即した調査観察結果を記すもの）、②授業の評価（参観または補助した授業についての評価を記すもの）③授業補助としての自己評価、④授業力に関する省察（授業力に関して、自己のキャリアを振り返りつつ、本実習の意義をまとめ、今後の自己課題を記すもの）とした。

加えて、授業力に特化してリフレクションを進

■ 実習日誌 4		実習種別	特別支援教育力開発実習 (仮)	配属	小学部すみれ組
		実習日	平成27年9月14日(月)		
【授業名】 時間	主な活動	活動の様子		リフレクション	
【日常生活の指導】 08:40	荷物管理 更衣 排泄 朝の会	<ul style="list-style-type: none"> ・0君、荷物整理の場面、ハンカチのおり方がしっくりこないようで、次の行動にうつれない。二度目の折(谷折り)で生じるしわが許せないようだったので、私が人差し指で抑えてシワを予防するとうまくいき、ポケットにハンカチをしまい、着替えに向かう。 ・更衣では、シャツを脱ぎ、ズボン脱ぎがかった。シャツを脱いだら、シャツを着る手順を進めているところ。上下とも脱いでしまわないようにと思ひ、私がそれを制止し、「シャツが先だね」と声をかけると「ズボン」と0君。自分の手順を主張した。「シャツが先だね」と再度声をかけると説得に応じた。更衣動作のたびにふらつき、スムーズにはいかない。机、人、壁など支えを探す。 		<ul style="list-style-type: none"> ・些細なことなのだけれども、生活の流れの引っ掛かりになってしまふことがよくある。それへの対処が可能なことであれば、またそれを私たちが把握できればいい。担任の先生方は児童一人ひとりのそういうところに思ひを馳せている。私は、これまでの教職ではだんだん強くなる傾向があった。 ・高校の陸上部員ならば体操トレーニング、と思ふところだが、訓練よりも習慣としての安定的な更衣姿勢を確立できないものかと思案する。 	

図2 実習日誌の一部(様式と記入例)

■ 実習報告書		実習種別	特別支援教育力開発実習 (仮)	実習期間	平成27年9月14日(月)～9月18日(金)
1 調査	個別の指導計画の実施状況について観察による調査をした。 日常生活の指導、生活単元学習、体育、チャレンジ、自立活動の授業に参加。そこで個別の指導計画の実施状況については下記の通り。 ①日常生活の指導：更衣、排せつ時に実施。ただし、記述以外にも多くの留意事項があり、担任の先生方からの口頭指示によって、理解し実施した。 ②生活単元学習：「その日の活動がわかり…」という汎用性の高いものと「調理」にかかわる限定性の高いものが記載されている。前者のみの実施。……以上から次のことを考えた。生活単元学習の個別の指導計画においては本単元の計画が必要だった。一般的に、学期始に一括作成する業務形態では、×単元の記載はできないが、……				
2 授業の評価	担任の先生方は、児童個々の様子を把握し、そのコンディションの変化などにも柔軟に対応している。対応性という観点では、きわめて期調で安定的な学級経営、授業づくりである。 授業の目標は、……以上から次のことを考えた。 ①生活単元学習では、学校生活の中核であるべきことに見合った活動量を確保した。…… ②題材として、紙粘土から陶芸への発展は、題材の扱いとしてスムーズだった。一方で紙粘土自体が究極的なボロンシヤルを有する題材であると思ひ、移行手段にだけするのは惜しい。 なお、代案を、スピンオフ授業案として構想した。				
3 授業補助としての自己評価	授業補助の立場で考えなければならないのは、T1の設計した授業計画に即して進行を補佐すること。個別の指導計画の確実な実施。そして、その先にある子ども主体の活動の実現である。前の二者については、子ども主体の活動の実現という目標を授業者間で共有したうえでの手立てである。しかし、授業補助である私にとつての作法でもある。……				
4 授業力に関する省察	私は、教職経験において授業者チームの中心となり授業を設計することが多かった。また、その過程では生徒の個別的な対応についても、積極的に構想した。特に初任校において、私は、気の合う仲間(同僚や生徒)とともに学部を主導して授業づくりをした。…… ……私は、自己中心性に近いリーダーシップから、同僚性あるリーダーシップへと切り替えて、ミドルリーダーにならなければならないと考えているようになった。この実習において、その役割のイメージを具現化することができた。				

図3 実習報告書(様式と記入例)

められるよう、また自らの授業力開発を意図して、指導案を作成することにした。これは、実習期間中の授業を題材に、実習生自身がメインティーチャーとして授業を計画することを仮定したもので「スピンオフ(脇役を主役に仕立てた外伝作にち

なむ) 指導案」と仮称した。これを図4に示した。

(6) リフレクション

実習生は、実習の省察をすべく「リフレクション科目」にて大学教員による指導を受ける。この模擬実施では、実習生は実習の概要を報告し、「個別の実習計画」の目標に即した自己評価をし、「実習報告書」をもって、自己の教職経験について省察を述べた。大学教員からは、目標と評価の整合や、教職経験を相対化し、意味づけを促進するような発問があり、実習生がそれに応じた。

また、スピノフ授業案をもって、その内容の検討を行い授業論に関する協議を深めた。総括として、実習生の今後の教職におけるミドルリーダーとしての課題に言及し収束した。

(7) 事後協議

事後協議では、第一筆者が実習生の立場を離れ、一連の取組を俯瞰する立場で協議した。

第一に、模擬実習における成果として、次の2点が挙げられた。これは、本実習においても同様に起こりうるものであり、念頭に置きたい。

- ① 実習生による学級の児童の見立てや、かかわりが担任団にとっての参照資料となった。これは、第三者としての、着眼の角度が新鮮だということであり、附属特別支援学校の教員の視野拡大に寄与するというものであった。
- ② 実習生による調査の内容は、校内研究の内容の発展に寄与するものであった。具体的には、個別の指導計画の運用及び活用に関する問題提起となった。

第二に、実習の条件に関する課題点の指摘として、次の7点が挙げられた。

- ① 実習生が担任教師よりも教職経験年数や実年齢が上である場合などには、その関係性の中で遠慮や躊躇などの心理的負担が生じる可能性があるだろう。
- ② 実習は、11月に設定されているが、この時期は学校公開直前の時期である。ここでは、授業を任せることはできないという指摘があった。そもそも学習支援及び学級経営について補助業務をもって実習とするため、このよう

な時期だからこそ、実習生には適切に学校業務を下支えすることでの活躍を期したい。なお、関連して、同時期に学卒院生の実習もあり、その中では「一つの単元全体の指導計画を立案し授業実践と評価までを行う」ことがシラバスにて明記されている。そこで、公開対象ではない授業のメインティーチャーをすすめる案が出された。

- ③ 実習期間の前後には、「アクションリサーチ(仮称)」として週1回、木曜日に訪問する。これを実習の予備的な取り組みとして有効に活用したい。具体的には、現職院生にとって、実習の場となる学級とその児童生徒の様子を深く知る機会となる。その中で、自らの研究テーマを明確にしたり、調査研究のためのプロセスとしたりすることを期待する。同時に実習校にとっては、現職院生が準スタッフとして、非常勤職員のごとく活用することをメリットとしたい。しかし、週1回の訪問では、授業の実施、放課後の改善検討、翌日の再実施と評価などの協働的循環を経験できない状況である。模擬実習はまさにそうであった。授業はすれども放課後の準備や改善の取組をしないのであれば、準スタッフとして、相互に認知し合えるかとの懸念も示された。実習生の配属については、学部、学級を固定的に考えることが望ましい。アクションリサーチ期間中に固定し、理解や取組が深化することを期するものである。関連して、同時期に実習を行う現職院生と学卒院生のかかわりを考えるならば、同学部、学級の配属がよいのかという指摘もあった。現職院生が学卒院生に対して、学校の状況を解説したり、何らかの相談対応をしたりすることは想定しており、むしろミドルリーダーとしての力量の発揮の一場面として期待する。しかし、両者のかかわりは、実習校という場や実習期間という時間の中で完結させるものではなく、教職大学院全体の教育活動の中で実現されていけばよい。したがって、現職院生と学卒院生の

配属については同一を望むものではない。
むしろ院生個々の研究テーマによって規定さ

れてよい。

小学部すみれ組 生活単元学習授業案（スピノフ）

授業者 佐々木、杉本、熊谷、立花。
対象児童 すみれ組（男子5名、女子1名）
実施期間 平成27年9月7日～18日。
（本時は、9月8日3-4校時）

I 単元・題材名
附属小学校に上組の友だちに記念メダルを送ろう。

II 単元の目標
・首尾よく存分に記念メダルの製作に取り組んでほしい。
・附属小学校に上組児童の来校への期待をもち、歓迎してほしい。

III 単元・題材の設定にあたって
附属小学校（4年にし組）との交流及び共同学習が18日に実施される。
一学期には小学部児童全員で附属小学校に出向き、にし組児童と歌遊びやゲームで親睦を深めた。今回は、附属小学校にし組児童が来校する。
本単元では、本学級児童がにし組児童の来校への期待を持てるよう、プレゼントとしての記念メダル作りを行う。その製作過程の進行は、にし組児童の来校日の接近を象徴する。すなわち、製作活動中に「もう少しで完成だね、にし組の友だちと会うのが楽しみだね」などという会話をもって活動の見通しを共有することができるだろう。
さて、本学級児童は、調理活動を含め立体、平面など多様なものづくりに取り組んできた。また、ものづくりは、その内容（目的物とその数量、工程など）によって反復・持続的に取り組むことをしやすく、児童の様子に応じた分担作業ができるため、繰り返し活動の中で、児童は、要領を得て見通しを持って活動することができる。また、分担作業は、俯瞰すれば目標物の完成をもって協働を実現、実感できるものである。
題材とするのは、紙粘土を素材としたメダル作りである。紙粘土は手摺に入手でき、安全かつ自在に加工可能な素材であり、小学校段階におけるもの作りにおいては伝統的に用いられてきた。
児童には、メダル作りのプロセスと完成した達成感をもって、この交流及び共同学習への期待とにし組児童への歓迎の思いを影らませてほしい。また当日の朝禮、記念になるようなプレゼントとしたい。

IV 単元計画
単元期間：平成27年9月7日（月）～9月18日（金）、全20時間（交流及び共同学習の時間を含む。）生活単元学習は3-4校時だが、前後の教科別の指導の時間には、本単元内容を関連付けて実施するため、表1に併記した。

表1 単元計画

日	1校時 朝の会	2校時 チャレンジ	3-4校時 生活単元学習	5-6校時 体育、音楽	備考
7(月)	交流時にうたう曲に歌り進む。	単元目標表づくり（審判、旗飾などを分担） メダル作りの工程表を兼ねる※。	パーツの切りだし（70分） ・たたらづくり（初期、再生） ・絵の具の塗りこみ ・型抜きをA、B ・文房スタンプ	体育 縄かきウォーク（ウォーク中のBGMとして交流時にうたう曲の中からテーマソングを選定し用いる）	※チャレンジの活動では、転知学習要を評価する。
8(火)		製作過程の撮影、頒付のメッセージカードづくり、進行表とスピーチ※。	・カット（本体） ・カット（ピース）	音楽 歌、歌遊び	※メッセージカードにスタンシール印刷を施す。
9(水)			塗装：表・裏面（70分） ・着色、クリア ・スタンシール印刷	（下校）	
10(木)				体育 縄かきウォーク（テーマソングをBGMにする）	※アクリル絵の具を使用。
11(金)				（下校）	
14(月)			メダルの組み立て ・パーツの組合せ ・組直し ・リボンつけ	体育 縄かきウォーク（テーマソングをBGMにする）	
15(火)			入場ゲートのづくり ・ゲート本体（紙ボールド、着色） ・ゲート壁面の装飾（紙粘土工作、及びメダルの展示スペースを兼ねる※）	音楽 歌、歌遊び	※ゲートの壁面装飾では、メダル製作技能を駆使する。
16(水)				（下校）	
17(木)				プレールーム（交流会場）の掃除	
18(金)			入場ゲートの設置、メダル展示	（下校）	※見送りにてメダルを送す。

（留意点）※メダルの撮影は、本校児童、引率教員、本校小学部児童、教員、予備として7名。
・4校時終了時には、給食当番以外のメンバーで教室掃除、復元付けを行う。

3 個別の指導計画

本時の目標を、単元目標と、個別の指導計画との階層関係を併せて、表3に一覧した。なお、単元目標2点目「附属小学校にし組児童の来校への期待をもち、歓迎してほしい」については、活動全体を通じて随時・日常的に取り組むものであり、授業に特化した内容ではないためにここでは割愛する。

表3 単元目標、本時の目標を、個別の指導計画の内容

単元目標	本時の目標	個別の指導計画	
目標	目標	児童名（担当工程） 目標 手立て	
首尾よく存分に記念メダルの製作に取り組んでほしい。	担当の作業工程について、手順よく歌り進んでほしい。	A君 ○たたらづくり：型紙を使用して、紙粘土を板状に12ミリ厚成型する。 Bさん ○たたらづくり：前半はA君と同じ。後半は、切り出し作業で生じた端を再利用してたたらを作りなおしたり、「ありがとう」の文房スタンプをメダル本体裏面に押し付けたりする。 C君	たたらづくりでは、材料 ◎作業手順を理解、習熟しやすいように、作業手順に応じた作業動線を配置する。右手から材料量を巻、作業スペース、加工資材位置を標とする。 ◎型紙が水気を吸って粘土が濡り付かないよう、複数本準備し、1回ごとに持ち代える。 ◎12ミリ厚に加工するために、同ミリ厚の本枠をスペースサーとして使用する（図3参照）。 ●型紙を乾かす作業動作をリズムよく反復・持続しやすいよう、「1、2、1、2」と声をかける。 ●加工作業の傾度を一定にするために仕上がり具合を確認しあう。 ◎作業手順を理解、習熟しやすいように、作業手順に応じた作業動線を配置する。右手から材料量を巻、作業スペース、加工資材位置を標とする。 ◎スタンプを材料の定位位置に押せるようなマスキングシートを使用する（図4参照）。 ●スタンプを押す時間を一定にするために、「1、2、3」と数唱するよう促す。 ◎作業手順を理解、習熟しやすいように、作業手順に応じた作

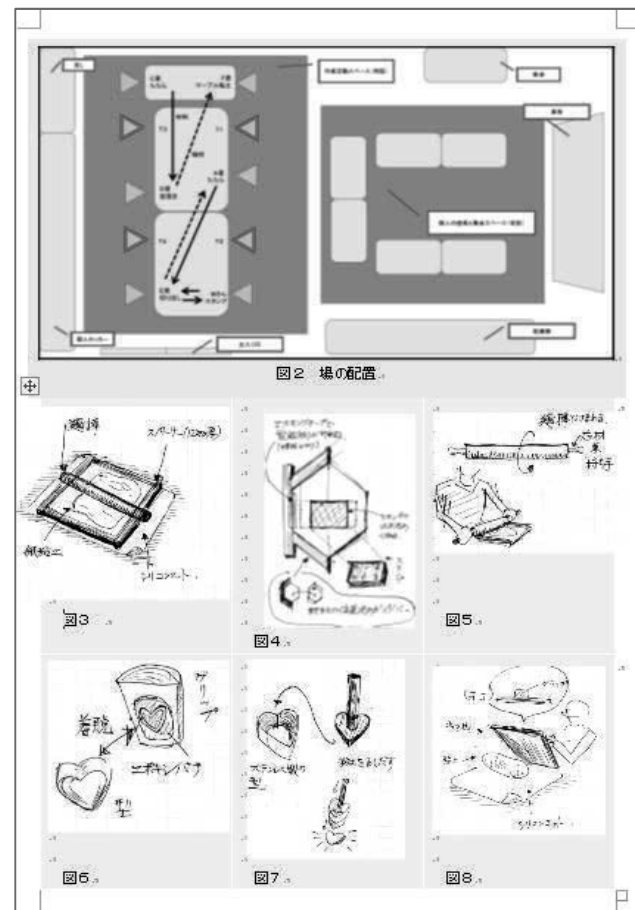


図4 スピノフ指導案（技料）

- ④ 配属に関連して、その恒常性についての展望を確認した。具体的には、配属の現職院生は、毎年度1名ずつ派遣される見通しであるが、学卒院生は流動的である。仮に、学卒院生が2名であれば、平成28年度は合計3名の院生が実習することになる。翌年度以降同数とすれば、平成29年度以降は常時6名（うち2名が現職院生）が実習することになる。
- ⑤ 校務分掌の所属は、1年次では研究部、2年次では支援部としたい。それぞれの年次で、授業力開発、子ども支援力という実習上の力点を明確化するためである。
- ⑥ 個別の実習計画から、スピノフ指導案までの一連の様式集は妥当。なお、指導案の様式については本校様式を用いることを考え、アクションリサーチ期間において指導を受けることが望ましい。

第三に、模擬実習以外の内容について、今後の検討課題として次の2点の指摘があった。

- ① ミドルリーダーとしての指導的力量的開発を想定し、「学習支援における子ども理解の内容と方法について、補助業務を通して実践的に学習し、指導的な立場から助言できる機会を設定する」ことがシラバスにて計画されている。この取組をどうすべきかとの問題の指摘があった。これについては、模擬実習で想定した授業力は、指導的力量的の裏付けとなる。しかし、指導的力量的は、適時適切に発揮されるべきであり、常時指導的な態度ではいけない。授業補助の場面では、同僚性の発揮が重視される。指導的力量的の発揮の場としては別途必然性ある場面を設定することがよいと考えられた。例えば、学校公開の取組の一環である「共同研究者」（従来は、大学教員が担っていたもの）の任務に就き、授業研究会にて発言するなどである。
- ② シラバスには「特別支援学校における児童生徒への支援及び学級経営のあり方と課題について管理職としての立場からレポートを作成し、意見交換の機会を通してお互いの意識啓

発を図る」とある。この取組をどうすべきかとの問題の指摘があった。これについては、具体的な活動内容の想定が必要である。例えば、学級経営案に関する中間的評価や個別の指導計画の運用及び活用に関する校内システムの点検整備や運用、学校評価の集計と分析などが考えられる。

4. 考察

本稿では「特別支援教育力開発実習Ⅱ」の実施イメージの一端を、個別の実習計画からスピノフ指導案までの様式集として開発、提起した。これは無形だった実習構想の有形化の一步である。

また、模擬実習を通じて、実習生である現職院生、実習校の教員、大学の教員の三者が、具体的に実施イメージの一端を共有し、協議によって実習の形式のみならず内容や質に踏み込んだ検討がなされた。その中には、実習校の教員心理の開示内容も含まれていた。このことは、模擬実習としての実践を共有したからこそ得られた知見であり、協働する上で大切にしたい点である。今後の確かな足がかりと考えたい。

最後に、模擬実習にご理解とご協力をいただいた附属特別支援学校の同僚の皆様、小学部児童の皆様、保護者の皆様に記して感謝申し上げます。

引用文献

清水将, 清水茂幸, 菅原純也, 根木地淳, 松村毅, 加賀智子, 高橋走 (2015): 教職大学院の教科領域教育としての「学校における実習」の在り方に関する基礎的研究—宮崎大学教職大学院の事例から—, 教育実践研究論文集, 2, 30-35.